

# 学食「VIEW」の味を再現

## 「専大黒門カレー」新発売 学生が企画・開発

専大オリジナルのレトルトカレー「専大黒門カレー」が新発売された。専修リーダーシップ開発プログラムを受講した学生と、専修大学購買会を運営する「専大センチュリー」が協力して企画。生田の学生食堂「レストランVIEW」の味をベ

ースにして、専修大学購買会で商品化した。昨年度の第9期専修リーダーシップ開発プログラムの活動の一つとして、専大センチュリーチームは、購買会の認知度や利用率向上に取り組んだ。

新商品開発に挑む中で、「専大ならではの味を作ろう」とレストランVIEWとコラボレーション。在学生の意見を取り入れて辛さを加えつつも伝統の味を再現した。

メンバーは入学してからオンライン授業が主で、学食を利用する機会があまりなかったという。「自宅でも専大の味を味わうことができる。また一人暮らしをしている学生の保護者や、卒業生にもぜひ食べてもらいたい」と川口結音さん(商2)。

パッケージデザインもメンバーで手掛け、黒と金を基調に、専大のシンボルである黒門を描いた。塚平しほさん(経済2)は「専大関係者と協力して、一から商品開発するという貴重な経験ができた。今後の学修に生かしたい」と語る。

専大黒門カレーは420円(税込)だ。生田、神田の購買会の店舗のほか、オンラインショップでも販売している。



生田、神田の購買会やオンラインショップで発売中



「専大黒門カレー」を企画開発したメンバー

## 文・福富プロジェクト「かわスキ」 川崎市の魅力伝える番組を制作



入賞した久保田さん、山本さん、金子さんと福富教授(左から)

### 映像創作展で 4作品が入選

メディアコンテンツ制作について学ぶ文学部ジュニアリズム学科の福富忠和プロジェクトと福富ゼミでは、生田キャンパスにある川崎市の魅力を学生目線で紹介する情報

バラエティー番組「かわスキ」を毎月制作、地元ケーブルテレビ局「YOUTUBE」で放送している。番組用に制作した映像のうち4本が、アマチュア映像コンテスト「第39回わが町かわさき映像創作展」で入選した。銀賞を受賞したのは、「川崎のロボット特集

## 台湾・エストニアの学生とオンラインで交流

### 佐竹ゼミ「文明を歩く」

佐竹弘靖教授ゼミ「文明を歩く」は、ユーラシア大陸やアメリカ大陸などの民族や風土、生活、宗教などについて、文化人類学、比較文学、スポーツ人類学など幅広い視点から学んでいる。年一回、さまざまな国・地域で海外フィールドワークを行ってきたが、新型コロナウイルス感染症の影響で渡航は中止。代わりにオンライン交流を活発に行っている。昨年度のゼミ活動に参加した学生に体験記を寄せてもらった。

## 日本とは違う「当たり前」

【体験記】小島 凪さん(文4)

「文明を歩く」ゼミでは、ゼミ内で没する猿の様子を動画で紹介して交流したい国を選び、その国の学生とコンタクトを取って交流会を開く活動を行っています。2021年度は12月に台湾の中山大学、2月にエストニアのタリン大学の学生とオンライン交流会を行いました。中山大学との交流会では、大学周辺の観光スポットや、中山大学に出



オンライン交流会ではSDGsや環境問題について語り合った

エストニアはIT大国であり、その実態を知りたいと考えて交流を行いました。しかし実際に会話を重ね

ると、エストニアは自然豊かな国という特徴を併せ持っていることが分かりました。あいさつなど簡単なエストニア語を覚えてもらいました。発音は難しいですが、中には日本の佐久市と同じ「サク」という都市があり、親近感を覚えました。

今回の交流会では、新しい試みとして、SDGsと絡めて環境問題を取り上げました。台湾では日本の過剰包装について話し合い、エストニアでは森林伐採が問題となっていることを知りました。他国の環境問題を共有することで、世界的な課題を認識するとともに、私たちが思っている「当たり前」が世界での常識でないことを強く意識する結果となりました。

私たち「文明を歩く」ゼミは、今後も活動を通して日本と世界各国の魅力を外に発信し続け、各国が抱えるこうした問題についても見識を深めていきたいと思っています。

## 専修人の新しい本

聖ヤコブ崇敬とサンティアゴ巡礼  
——中世スペインから植民地期メキシコへの歴史のつながりを求めて



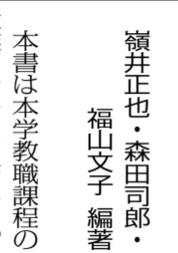
井上幸孝 共著

扱っている。従来の個別研究ではカバーしきれなかった広範な時間的・地理的範囲を対象とし、時代と地域を越えた歴史的展開を追ったものである。

中世スペインにおける聖ヤコブ崇敬の始まりと巡礼の最盛期、中世後期から近世初期にかけての王権や貴族と聖ヤコブ崇敬の関係、メキシコにおける聖ヤコブ崇敬定着の過程や問題点を論じた六つの章からなり、五つのコラムも収められている。(春風社・税込4400円)

共著者(いとうえ・ゆきたか) 国際コミュニケーション学部教授。メキシコ史・メソアメリカ史。

副題には「本学の21世紀ビジョンに即し、地球的視野を持ち、人間・子ども理解を深め、実践力のある教員になってほしい」との願いを込めた。(八千代出版・税込2750円)



福山文子 編著



宮田 宗彦  
国際コミュニケーション学部准教授  
(外国語教育研究室長)

## 翻訳とは難しく不完全なもの

我々が英語で書かれた文章を理解しようとする時、日本語に訳し、意味を理解しようとする。しかしこのような時、きちんと日本語にすることができない、またはなかなか日本語の訳がしっくりこない、という経験をしたことはないでしょうか。外国語で書かれたものは寸分違わず翻訳できると一般的に信じられていますが、これは誤解です。実は、外国語で書かれたものを正確に翻訳しようとしても、元のメッセージを完全に日本語にすることはできません。翻訳はなぜ難しく不完全なのかということについて、問題となるのが言語の恣意性です。

言語の恣意性とは、言葉の音声とそれが指示する意味との結びつきは、必然的なものではなく、社会慣習的な約束事で、恣意的である事実を示したものです。翻訳の難しさは、外国語では音声と意味の結びつきが日本語と異なることにあります。

簡単な単語を訳そうとする時でさえ、この問題について回ります。例えば、英語の「water」は日本語では「水」と訳しますが、厳密にはwaterと水は同じものではありません。Pour water for tea. という場合は「水」ではなく「湯」になりますし、There is a lot of water in the air. という時には「湿気」と訳したほうが正しいでしょう。これは「water」の音声とそれが指示する意味が「水」のそれとは異なることから発生する問題です。つまり、翻訳とは、外国語で表現された意味の分析と解釈に伴い、その意味に最も近似する日本語の表現を訳出しなければならない困難で不完全な創作活動なのです。

(応用言語学〈第二言語習得・英語教育学〉)

短縮版。全文はCALL教室ホームページで。